

令和5年3月

掲載論文の取り下げについて

富山大学人文学部総務委員会

『富山大学人文学部紀要』の下記論文は、オーサーシップ上の配慮を欠いていたこと及び研究データの扱いに瑕疵があったことを理由として、著者から取り下げの申し出がありました。本委員会は、この申請を審議し、受理いたしました。したがって、当該論文は取り下げとなりました。

著者	表題	刊行年	巻号	掲載頁
黒川 光流	集団内葛藤への対処方略に初期意見不一致の程度および課題特性が及ぼす影響	2017年	第66号	43-53頁
黒川 光流	複数領域の情報がステレオタイプの形成に及ぼす影響	2018年	第68号	19-26頁
黒川 光流	発話のタイプおよびパターンが発話者の印象に及ぼす影響	2018年	第69号	79-88頁
黒川 光流	コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制に及ぼす影響	2019年	第71号	49-59頁
黒川 光流	ポジティブ・フィードバックに対する反応に自尊感情および評価基準のずれが及ぼす影響	2020年	第73号	67-77頁
黒川 光流	失敗に対する反応に自尊感情が及ぼす影響	2021年	第75号	77-87頁

以上

コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が
発言抑制に及ぼす影響

黒川光流

富山大学人文学部紀要第71号抜刷

2019年8月

コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制に及ぼす影響

黒川光流

問題

同じ目標の達成を目指しているメンバー同士であったとしても、集団で課題に取り組むときには、意見の不一致や対立が生じることがある。メンバー間の意見の不一致や対立が集団の目標や課題とは直接関係しない、メンバーの人柄や性格などに起因する場合、集団全体および個々のメンバーの効果が低下することが指摘されている (de Dreu & Van Vianen, 2001; de Dreu & Weingart, 2003)。一方、集団で取り組む課題に直接関わる事柄についての考えや意見の対立は、それを経験することで、集団の意思決定を創造的で効果的にし、メンバー個人の拡散的思考や創造的な情報処理を促進することが示唆されている (De Dreu & West, 2001; Nemeth, Personnaz, Personnaz, & Goncalo, 2004)。

課題に関するメンバー間の意見の不一致や対立が、集団全体あるいは個々のメンバーに効果をもたらすのは、対立する相手の考えや意見に配慮すると同時に、自分自身の考えや意見を主張しながら不一致や対立の解決を試みるのが前提となる (Blake & Mouton, 1964)。しかし、他者との対立を経験したとしても、日本人は自分の考えや意見を表明しない傾向が強いことが報告されている (Ohbuchi & Takahashi, 1994)。集団での討議場面では、誰もが自分の考えや意見を表明するわけではなく、他者から促されない限りは発言しようとし、あるいは発言を意図的に控えることさえある。会話状況において発言をしない発言抑制は、メンバー間の意見の不一致があるか否かに関わらず、集団討議状況ではしばしば生じているのである。

集団討議状況への各々のメンバーの関わり方は、コミュニケーション・スタイルとして捉えることができる。集団討議にどのように関与し、どのような機能を果たすのかを示す行動傾向としてのコミュニケーション・スタイルは、“会話マネジメント”、“能動的参与”、“受動的参与”、および“消極的参与”の4つに分類されている (藤本, 2008)。“会話マネジメント”とは、話を盛り上げたり発言を促したりするなど、司会者的な役割を担い、会話の流れに関与していく行動傾向である。“能動的参与”とは、自分の意見を述べたり他者の発言へコメントしたりするなど、話し手として積極的に発言する行動傾向である。“受動的参与”とは、自発的には

発言せず、聞き手として相手の発言に興味を持って傾聴する行動傾向である。そして“消極的参与”とは、実質的には会話に参加せず、傍観者として会話を見守ろうとする行動傾向である。コミュニケーション・スタイルは、発言行動の生起プロセスとの関連は検討されているものの(藤本, 2012), 発言抑制との関連は十分に検討されていない。しかし、会話マネジメントおよび能動的参与は、発言に対する積極性という要素では共通しており(藤本, 2012), これらのスタイルをとる傾向が強いほど発言抑制は少ないことが予想される。逆に、受動的参与および消極的参与はいずれも発言に対して積極的ではなく、これらのスタイルをとる傾向が強いほど発言抑制は多いと予想される。

ただし、会話マネジメントのスタイルをとる傾向が強い場合でも、他者の発言を促し、その反応を待ち、促しに対する応答を聞こうとする間は、意図的に発言を控えようとし、発言抑制が多くなる可能性もある。さらに、受動的参与のスタイルをとる傾向が強い場合でも、傾聴した他者の発言に対して理解や同意を示すため、感想や意見、評価などについて発言する必要がある(藤本, 2012), 発言抑制は少ない可能性もある。また2者による会話では、一方が話し手となると、他方は必然的に聞き手にまわることになり、会話における役割は明確であるが(藤本, 2008), 集団討議状況では、1人が話し手として発言をするとき、話し手以外の者はみな聞き手になる。したがって、討議の参加者が多くなるほど、聞き手になる時間は増加し、発言機会そのものが少なくなり、話し手以外の役割は不明確になる(藤本, 2012)。発言抑制を少なくする機能をもつコミュニケーション・スタイルをとる傾向が強い者であっても、集団討議状況では発言機会が少ないため、発言抑制をせざるを得ないことがあったり、コミュニケーション・スタイルが行動に反映されにくくなったりするとも考えられる。

日常的に行われる2、3者間の会話を中心とした個人的な会話においては、発言抑制が生じる際に意識される内容が検討され、“適切性考慮”、“否定的結果”、“関係回避”、および“スキル欠如”の4つに分類されている(畑中, 2006)。“適切性考慮”とは、その場の状況や相手との関係において発言するのが適切かどうかを意識することである。“否定的結果”とは、自分の発言によって相手から拒否されてしまったり、場の雰囲気が悪くしてしまったりするのではないかと、発言後の否定的な結果を意識することである。“関係回避”とは、相手との関係を考慮したうえで、相手との関わりを回避し、あえて発言を抑制することで、相手との関係を良好に保つことを意識することである。そして“スキル欠如”とは、うまく話すことができないと思うことにより発言を避けるなど、コミュニケーション・スキルの乏しさを意識することである。

これらは、相手との関係やその場の状況を認識することにより生じる意識である。個人間の会話よりも集団討議状況では、会話に参加する人数が増えることにより、注意を向ける相手も増え、場も複雑になるため、これらの意識と発言抑制との関連はより顕著に表れると考えられる。つまり集団討議状況においては、個人の行動傾向としてのコミュニケーション・スタイル

よりも、これらが意識されることが、発言抑制を促進するとも考えられる。しかし、集団討議状況において、これらの意識と発言抑制との関連は十分に検討されていない。

コミュニケーションの目的や参加する人数によって、集団討議の展開や内容は異なると考えられるため（藤本, 2012）、本研究では5名集団での課題の解決に向けた討議状況を設定する。また、会話の活発さは会話の相手との親密さの影響を受けやすく（Taylor, Peplau, & Sears, 1994）、初対面の相手との会話という特殊な状況では、コミュニケーション・スタイルが会話行動に反映されにくいと考えられる（藤本, 2012）。したがって本研究では、既知の関係にあるメンバー同士の集団を対象とする。以上を踏まえ、コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制におよぼす影響を検討する。

方 法

実験参加者

大学生75名（男性18名、女性57名、平均年齢20.4歳、 $SD=1.1$ ）が実験に参加した。実験参加者は互いに面識のある5名1組で実験に参加した。

集団討議課題

「砂漠で遭難したときにどうするか」という集団討議課題を用いた。乗っていた飛行機が砂漠に不時着し、大破炎上したが、5名だけが奇跡的に無傷で助かったという状況において、飛行機焼失前に取り出した、懐中電灯（乾電池が4つ入ってる）、ガラス瓶に入っている食塩（1000錠）、この地域の航空写真の地図、1人につき1リットルの水、大きいビニールの雨具、「食用に適する砂漠の動物」という本、磁石の羅針盤、1人1着の軽装コート、弾薬の装填されている45口径のピストル、化粧用の鏡、赤と白のパラシュート、および約2リットルのウォッカの12の品目について、5名全員が生き残るために重要であると思われるものから順位をつける課題である。

測定内容

実験参加者同士の親密度 一緒に実験に参加した自分以外の4名それぞれとの親密度について、「1. 親密な関係ではない」から「4. 親密な関係である」の4件法で回答を求めた。

コミュニケーション・スタイル 「普段、知り合い同士の5人程度のグループで、ある課題について話し合うときに、あなたはどのような会話行動をとりますか」という問いに対して、COMPASS（藤本, 2008）の項目を用いて回答を求めた。“会話マネジメント”として「話を盛り上げる」、「話を広げていく」、「沈黙を作らないようにする」、および「みんなに意見を言っ

てもらるように話をふる」の4項目, “能動的参与”として「言いたいことを遠慮せずに言う」, 「自分の意見を主張する」, 「尋ねたいことを遠慮せずに尋ねる」, および「気になる点を指摘する」の4項目, “受動的参与”として「話の内容を理解するように心がける」, 「発言者の意見に耳を傾ける」, 「みんなの考えを理解するように心掛ける」, および「相づちをうちながら聞く」の4項目, そして“消極的参与”として「話し合いを見守る」, 「黙って聞いている」, 「あえて口出ししない」, および「傍観する」の4項目, 計16項目に対して, 「1. 全く当てはまらない」から「6. 非常によく当てはまる」までの6件法で回答を求めた。

集団討議時の意識 畑中(2006)を参考に, “適切性考慮”として「一方的に言い過ぎないようにしようと思った」, 「相手が理解しやすいように話そうと思った」, 「自分は話す立場にあるかどうか考えた」, 「相手に過干渉になりすぎないかどうか考えた」, 「相手は自分の話を受け入れられる状態かどうか考えた」, 「その場で話すことが適切かどうか考えた」, 「その相手に対してどのくらい話しても大丈夫か考えた」, および「慎重に言葉を選ぼうと思った」の8項目, “否定的結果”として「こんなことを言ったら, みっともないかも知れないと思った」, 「その場の雰囲気が悪くなるかどうか考えた」, 「相手から嫌われてしまうのではないかと思った」, 「相手に対して失礼にあたるのではないかと思った」, 「相手の気分を害してしまうのではないかと思った」, 「こんなことを言ったら, 他の人がどう思うだろうかと考えた」, 「相手との関係が壊れるのではないかと思った」, および「相手から拒否されてしまうのではないかと思った」の8項目, “関係回避”として「何か言うのが面倒くさいと思った」, 「こんな人は放っておこうと思った」, および「相手とのかかわりを避けようと思った」の3項目, そして“スキル欠如”として「何も言わないのが賢明だと思った」, 「思っていることが言葉にならなくて困った」, 「どうせうまく話すことが出来ないと思った」, および「何を言ったらいいかわからなくて困った」の4項目, 計23項目を用いた。それぞれに対して「1. 全くそう思わなかった」から「4. 強くそう思った」までの4件法で回答を求めた。

発言回数および発言時間 集団討議課題遂行中の実験参加者の発言回数と発言時間を, 藤本・大坊(2006)を参考に, 会話中に表出された発話単位に基づいて測定した。発話単位とは1回の発言機会に連続して発言されたものを指す。ただし, ある会話者の発言が他の会話者により一時中断した場合は, その前後の同一会話者による発言を異なる発言として扱った。測定は研究内容を知らない社会心理学専攻の大学生2名が独立して行った。発言回数が一致しなかった場合には測定者2名による話し合いで決定した。発言時間は秒単位で測定し, 測定者2名の平均値を分析に用いた。

発言抑制の程度 集団討議課題遂行中に発言を試みたが「自分の意思で自分の気持ちや考えについての発言を控えた」程度, および「やむを得ず自分の気持ちや考えについての発言を控えた」程度について, 「1. 全く当てはまらない」から「4. よく当てはまる」の4件法で回答を

求めた。

手続き

実験参加者5名に実験室に集合してもらい、互いに面識があることを確認した。実験参加者に、5名で協力して話し合いながら課題に取り組んでもらうことを伝え、実験への協力および課題に取り組んでいる様子をビデオカメラで撮影することの承諾を得た。続いて、実験参加者は実験参加者同士の親密度およびコミュニケーション・スタイルを測定する質問票に回答した。5名の回答が終了した後、実験参加者はまず5分間、個別に課題に取り組んだ。その後、実験参加者に、5名全員で話し合い、多数決やくじ引きなどではなく、全員の合意に基づいてグループとして1つの結論を出すよう指示した。5名で話し合う時間は、村山・三浦（2014）を参考に18分間とした。話し合いは実験者の合図によって開始し、その後の進行には、実験者から一切の干渉は行わず、実験参加者の自由に任せた。課題に取り組む様子は、1台のビデオカメラによって撮影した。18分後に実験者の合図によって話し合いを終了した後、実験参加者は個別に、発言抑制の程度および集団討議時の意識を測定する質問票に回答した。回答終了後、ディブリーフィングを行い、実験を終了した。所要時間は約45分であった。

結 果

各変数の平均値、標準偏差、および相関係数

実験参加者集団の対人構造を確認するため、藤本（2008）を参考に、実験参加者同士の親密度の相互評定データをもとに、対人距離の集団平均を求めた。この対人距離の指標は1から4のレンジをとり、数値が高いほど親密であることを示すのだが、実験に参加した25グループの平均は3.21（ $SD = 0.36$ ）であったことから、実験参加者集団は一定以上の親密さにあったと判断される。

各変数の平均値、標準偏差、および各変数間の相関係数を表1に示した。なお、コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識については、各指標を測定する項目の平均値を得点とした。Cronbachの α 係数を算出したところ、コミュニケーション・スタイルのうち会話マネジメントは.721、能動的参与は.861、受動的参与は.741、消極的参与は.861、集団討議時の意識のうち適切性考慮は.736、否定的結果は.793、関係回避は.649、スキル欠如は.778であった。

表1 各変数の平均、標準偏差、および各変数間の相関係数

	平均	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1. 会話マネジメント	3.28	0.79										
2. 能動的参与	3.52	0.87	.60**									
3. 受動的参与	4.67	0.62	.12	.04								
4. 消極的参与	3.52	0.93	-.49**	-.56**	-.08							
5. 適切性考慮	2.54	0.52	.18	.04	.21	-.02						
6. 否定的結果	1.79	0.51	.08	-.03	-.09	.02	.56**					
7. 関係回避	1.37	0.47	-.07	-.08	-.17	.16	.11	.44**				
8. スキル欠如	1.78	0.62	-.23*	-.23*	-.06	.41**	.21	.45**	.58**			
9. 発言回数	78.90	39.13	.39**	.18	.02	-.22	-.07	.04	-.09	-.05		
10. 発言時間	130.60	79.46	.36**	.18	-.08	-.26*	-.09	.10	-.15	-.19	.75**	
11. 発言抑制	1.75	0.60	-.06	-.21	-.20	.27*	.21	.38**	.19	.27*	-.22	-.31**

*: $p<.05$ **: $p<.01$

コミュニケーション・スタイルを独立変数として、各スタイルの平均値について1要因分散分析を行った結果、有意な効果が認められた ($F_{(3, 222)}=40.06, p<.01$)。多重比較の結果、受動的参与の平均値が他のスタイルより有意に高かった (いずれも $p<.01$)。また、集団討議時の意識を独立変数として、各意識の平均値について1要因分散分析を行った結果、有意な効果が認められた ($F_{(3, 222)}=100.18, p<.01$)。多重比較の結果、適切性考慮の平均値が他の意識より有意に高かった (いずれも $p<.01$)。さらに、否定的結果およびスキル欠如の平均値が関係回避より有意に高かった (いずれも $p<.01$)。

コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制に及ぼす影響

発言回数、発言時間、1回あたりの発言時間 (時間/回)、および発言抑制の程度それぞれを目的変数、コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識を説明変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。その結果を表2に示した。ただし、集団はそれぞれで異なる会話コミュニケーションを行っており、発言の回数や時間は会話の盛り上がりなど個々の集団特有の現象の影響を受けやすい (藤本, 2018)。そのため、発言回数および発言時間に関しては、各実験参加者の発言回数あるいは発言時間を、5名の実験参加者全員の発言回数あるいは発言時間で除すことで集団内比率を算出し、それらを分析に用いた。

表2 コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制に及ぼす影響に関する重回帰分析結果

説明変数	基準変数			
	発言回数	発言時間	時間 / 回	発言抑制
コミュニケーション・スタイル				
会話マネジメント	.376*	.321*	-.050	.127
能動的参与	-.198	-.140	-.094	-.143
受動的参与	.000	-.026	-.164	-.184
消極的参与	-.049	-.039	-.004	.249+
集団討議時の意識				
適切性考慮	-.254*	-.304*	-.146	.057
否定的結果	.231	.298+	.405*	.318*
関係回避	-.333*	-.254+	-.161	-.055
スキル欠如	.097	-.085	-.333*	.042
$R(R^2)$.467(.218)*	.503(.253)*	.441(.194)+	.505(.255)*

+: $p < .10$ *: $p < .05$

発言回数に対しては、コミュニケーション・スタイルの会話マネジメントから有意な正の影響が認められ、会話マネジメントのスタイルをとるほど発言回数が多くなっていた。また、集団討議時の意識の適切性考慮からの負の影響に有意傾向が、関係回避から有意な負の影響が認められ、適切性考慮および関係回避を意識するほど発言回数は少なくなっていた。

発言時間に対しては、コミュニケーション・スタイルの会話マネジメントから有意な正の影響が認められ、会話マネジメントのスタイルをとるほど発言時間が長くなっていた。また、集団討議時の意識の適切性考慮から有意な負の影響が、否定的結果からの正の影響および関係回避からの負の影響に有意傾向が認められ、適切性考慮および関係回避を意識するほど発言時間は短く、否定的結果を意識するほど発言時間は長くなっていた。

1回あたりの発言時間に対しては、集団討議時の意識の否定的結果から有意な正の影響が、スキル欠如から有意な負の影響が認められ、否定的結果を意識するほど1回あたりの発言時間は長く、スキル欠如を意識するほど1回あたりの発言時間は短くなっていた。

発言抑制の程度に対しては、コミュニケーション・スタイルの消極的参与からの正の影響に有意傾向が認められ、消極的参与のスタイルをとるほど発言を控えたと感じていた。また、集団討議時の意識の否定的結果から有意な正の影響が認められ、否定的結果を意識するほど発言を控えたと感じていた。

考 察

本研究の目的は、コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制におよぼす影響を検討することであった。

コミュニケーション・スタイル

全体的な傾向として、集団討議状況では、聞き手として相手の発言に興味を持って傾聴する受動的参与のスタイルをとる傾向が強かった。コミュニケーションにおいて、話し手以外は全て聞き手になるため、そこに関わる人数が多くなるほど聞き手にまわる時間は増加する（藤本，2008）。5名程度の集団での課題の解決に向けた討議状況では普段から、2者間の会話とは異なり、受動的参与のスタイルをとる傾向が強くなるのだと考えられる。

集団討議時の意識

全体的な傾向として、集団討議状況では、その場の状況や相手との関係において発言するのが適切かどうかを意識する程度が高かった。2、3者間の個人的な会話で生起する発言抑制時に意識される内容を検討した畑中（2006）の研究と同様の結果であり、コミュニケーションの目的や参加している人数は異なっているが、他者とコミュニケーションをとる際には、適切性が意識されやすいことがうかがえる。ただし、集団討議時に発言を抑制する方向で機能することが予想される内容を意識する程度は全体として低く、相手との関わりを回避することで関係を良好に保つことを意識する程度は特に低かった。本研究に参加した集団のメンバー同士は元々既知の関係にあり、比較的高い親密さを有していたため、本研究で取り上げた内容をあまり意識しなかったのではないかと考えられる。

コミュニケーション・スタイルおよび集団討議時の意識が発言抑制に及ぼす影響

コミュニケーション・スタイルのうち、会話マネジメントのスタイルをとるほど、集団討議時に発言回数が多く、発言時間も長くなっていた。話を盛り上げたり、発言を促したりするなどしながら、会話の流れに関与することが、発言の機会を増やしたのだと考えられる。一方、消極的参与のスタイルをとるほど、発言を控えたと感じていた。実質的には会話に参加せず、傍観者として会話を見守ろうと意識することは、発言の回数や時間といった客観的行動指標には影響しないものの、集団討議において発言を控えたことは強く認識させることがうかがえる。すなわち、コミュニケーション・スタイルとしての会話マネジメントは、発言行動を促進することで発言抑制を抑制する方向で、消極的参与は発言を控えているという認識を強めることで発言抑制を促進する方向で機能することが示唆された。ただし、集団討議中の発言行動や発言

を控えているという認識に影響を及ぼすコミュニケーション・スタイルは比較的少なかった。

集団討議時の意識のうち、適切性を意識するほど発言回数が少なく、発言時間も短くなっていた。同様に、関係を良好に保つために相手との関わりを回避することを意識するほど発言回数が少なく、発言時間も短くなっていた。また、自らのコミュニケーション・スキルの乏しさを意識するほど、1回あたりの発言時間が短くなっていた。さらに、自分の発言によって相手から拒否されてしまったり、場の雰囲気が悪くしてしまったりするのではないかと発言後の否定的な結果を意識するほど、発言を控えたと感じていた。これらの意識内容は、2, 3者間の個人的な会話で発言抑制が生じたときにも意識されていることが示されている(畑中, 2006)。つまり、適切性、良好な関係のためにあえて関わりを回避すること、あるいは自らのコミュニケーション・スキルの乏しさを意識することは具体的な発言行動を抑制することで、否定的な結果を意識することは発言を控えているという認識を強めることで、発言抑制を促進することが示唆された。

ただし、発言後の否定的な結果を意識するほど発言時間および1回あたりの発言時間が長くなっていた。発言後の否定的な結果を意識し、相手から拒否されないように、あるいは場の雰囲気を悪くしないように、自分の考えや意見を丁寧に表明しようとした結果、発言時間が長くなったのではないかと考えられる。集団で意思決定を行う際、ポジティブな結果になると過度に楽観視すると、意見の表明が抑制されることが示されている(Janis, 1982)。ネガティブな結果を意識することは逆に、その結果を回避しようと発言行動を促進することで、発言抑制を抑制する可能性がある。

本研究の課題と効用

本研究では、発言を控えたという認識に加え、発言回数の少なさおよび発言時間の短さを発言抑制として捉えた。しかし、発言を控えたという認識は全体として高くはなかった。また、発言を抑制すれば、発言は回数、時間ともに減少すると考えられるのだが、発言を抑制したわけではなく、発言すべき考えや意見をもっていない場合にも、発言は少なくなると考えられる。発言抑制をしたと認識したときと、しなかったときの発言回数や時間の差異、あるいはその差異に対するコミュニケーション・スタイルや集団討議時の意識との関連を検討することで、それらの関係はより明確になると考えられる。

また本研究では、コミュニケーション・スタイルと集団討議時の意識とを独立したものとして捉えて発言抑制との関連を検討し、結果としてコミュニケーション・スタイルより、集団討議時の意識の方が発言抑制との関連が多く見られた。しかし、集団討議時にどのようなことを意識しやすいかにも個人差があると考えられ、その個人差の規定要因の1つがコミュニケーション・スタイルである可能性もある。コミュニケーション・スタイルなどの行動傾向や個人

特性と集団討議時の意識との関連も検討する必要がある。

さらに本研究では、集団討議の過程でメンバー間に意見の不一致や対立が生起していたか否かなど、集団討議の内容は考慮されていない。コミュニケーションは、相手との関係性や会話状況の影響を受けやすいため (Gumperz, 1982), 集団討議時にメンバー間の考えや意見の不一致が生起したときとそうでないときとは、発言抑制が生起する程度にも差があると考えられる。また発言抑制の生じやすさには発言しようとする内容が関与していることも指摘されており (畑中, 2006), 実際にどのような内容の発言が表明され、どのような内容の発言が抑制されたのかも検討する必要がある。

以上のような課題はあるものの、集団討議状況では、コミュニケーション・スタイルとしての会話マネジメントは発言抑制を抑制する方向で、消極的参与は促進する方向で機能することが示唆された。また、集団討議時に適切性、発言後の否定的な結果、関わりを回避すること、あるいは自らのコミュニケーション・スキルの乏しさを意識することは発言抑制を促進することが示唆された。ただし、発言後の否定的な結果を意識することは、発言時間を長くしており、そのような意識をもつことが、自らの考えや意見の時間をかけた丁寧な表明を促進する可能性があることも示唆された。

謝 辞

本研究はJSPS 科研費JP17K04312の助成を受け行われた。

引用文献

- Blake, R. R., & Mouton, J. S. (1964). *Managerial grid*. Houston: Gulf. (上野一郎 (訳) (1965). 期待される管理者像 産業能率大学出版部)
- de Dreu, C. K. W. & Van Vianen, A. E. M. (2001). Managing relationship conflict and the effectiveness of organizational teams. *Journal of Organizational Behavior*, 22, 309-328.
- de Dreu, C. K. W. & Weingart, L. R. (2003). Task versus relationship conflict, team performance, and team member satisfaction: A meta-analysis. *Journal of Applied Psychology*, 88, 741-749.
- de Dreu, C. K. W., & West, M. (2001). Minority dissent and team innovation: The importance of participation in decision making. *Journal of Applied Psychology*, 86, 1191-1201.
- 藤本 学 (2008). 会話者のコミュニケーション参与スタイルを指し示す COMPASS 社会心理学研究, 23, 290-297.
- 藤本 学 (2012). コミュニケーション参与スタイルに注目した小集団会話における発話行動生起プロセス 実験心理学研究, 51, 79-90.
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2006). 小集団会話における話者の発言傾向を規定する 3 要素 社会言語科学, 9, 48-58.

- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007). 小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターン 社会心理学研究, 23, 23-32.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge, New York: Cambridge University Press.
- 畑中 美穂 (2006). 発言抑制行動に至る意思決定過程—発言抑制行動決定時の意識内容に基づく検討— 社会心理学研究, 21, 187-200.
- Janis, I. L. (1982). *Groupthink: Psychological studies of policy decisions and fiascoes* (2nd ed.) Boston: Houghton Mifflin.
- 村山 綾・三浦 麻子 (2014). 集団討議における葛藤と主観的パフォーマンス—マルチレベル分析による検討— 実験社会心理学研究, 53, 81-92.
- Nemeth, C. J., Personnaz, B., Personnaz, M., & Goncalo, J. A. (2004). The liberating role of conflict in group creativity: A study in two countries. *European Journal of Social Psychology, 34*, 365-374.
- Ohbuchi, K. & Takahashi, Y. (1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. *Journal of Applied Social Psychology, 24*, 1345-1366.
- Taylor, S. E., Peplau, L. A., & Sears, D. O. (1994). *Social psychology* (8th ed.). Englewood Cliffs, N.J.: Prentice Hall.

